日向薬事始め（その１）
—秋月橘門とその業績—

*山本　郁男　　**岩井　勝正　　*井本　真澄　　*宇佐見　則行

Historical Studies on the Origins of Pharmaceutical Sciences in Hyuga (Miyazaki)(Part 1)
－Kitsumon AKIZUKI and His Achievements－

*Ikuo YAMAMOTO　**Katsumasa IWAI　*Masumi IMOTO　*Noriyuki USAMI

Abstract

The School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare located in Nobeoka City, Miyazaki Prefecture was founded in April, 2003. This place (Nobeoka) was famous to be called Himuka (Hyuga), an ancient name, since several hundred years ago. Himuka is still used in the historical and sightseeing books. However, it was no reasons why the School of Pharmaceutical Sciences did start at this place, Nobeoka. So, we searched all over the place (Himuka) for some people related to Pharmaceutical Sciences. As results, Kitsumon AKIZUKI (1909-1981) who lived in Nobeoka during Edo period was picked out among several persons. Although he stayed in Nobeoka only for two years, he had done many great things concerned in the education, medicine, botany, herbalism, philology and political events. Especially, Kitsumon AKIZUKI invited Hika KAKU, a famous herbalist, from Azimu, Usa (Oita prefecture) and let him investigate and herborize the local herbs near Nobeoka. This paper deals with Kitsumon AKIZUKI and his achievement in his life.

Key words：日向（宮崎）、薬学の起源、秋月橘門、江戸後期、本草学

キーワード：Himuka (Hyuga, Miyazaki) ,Pharmaceutical Sciences, Kitsumon AKIZUKI, herbalist, Edo Period

1．はじめに

ここ宮崎の地は古くより日向といわれ国生みの神話の里でもある。平成15年４月、九州保健福祉大学薬学部が宮崎県の北部に位置するこの延岡の地に誕生した。南九州（大分、宮崎、鹿児島、沖縄）に薬学の府が皆無であっただけに人々の関心は深い。しかるに、この地延岡に何故薬学の礎が創られたのか不明である。この原因を求めることは無駄なことではないであろう。そこで、その因を捜したところ秋月橘門という医師、本草学者がこの地にあって創設の土壌の一部をなしていたことが分かった。時は江戸時代後期にあたる。本報では秋月橘門と、彼と交流のあった人々を挙げ、彼の業績を考察し、日向における医薬の源流を探る手懸りを得ることとする。

2．時代的背景

秋月橘門（1809～1880）は日向にあって江戸後期、延岡藩（内藤家）の物産奨励の一つとして薬草の分布、栽培、利用を支援、指導した博学の人であり、日向におけ

*九州保健福祉大学薬学部衛生薬学講座　〒889-0511　宮崎県延岡市吉野町1714-1
Department of Hygienic Chemistry, School of Pharmaceutical Sciences, Kyushu University of Health and Welfare 1714-1 Yoshino-machi, Nobeoka, Miyazaki 882-8508 JAPAN
**悠生会吉田病院薬剤課　〒889－0511　宮崎県延岡市松原町4－8850
Division of Pharmacy, Yoshida Hospital, Yuseikai, 4-8850 Matsubara-machi, Nobeoka, Miyazaki 880-0813 JAPAN

るこの領域の5指に数えられる人物である。しかし、時代が時代であっただけに、彼の目的は完全には達せられていないものの彼の精神は残されていると考える。そこで初めに彼と彼を取り巻く時代的背景を明らかにしておきたい。なお内藤家は内藤政樹[1]が延享4年（1747）陸奥国磐城平（福島県）より7万石で入封して以来、内藤政挙の明治4年（1871）、廃藩置県を迎えるまで8代、125年間にわたって延岡に在封[2]したという歴史がある。

江戸時代の中期以降、各地の大名家の藩財政は逼迫。藩士の数が領土の広さに比べると多いほど甚だしく、当然のことながら大藩よりも小藩ほど困難であった。各藩は財政を立て直す[3]ために、家臣への扶持米の減額、リストラさらに特産品の創出等の物産奨励策が行われた。

その例に漏れず、延岡内藤藩もその名をもじって「金は内藤貧乏の守。袖からボロが下り藤（家紋）。（金は内藤；金は無いという、貧乏；備後（8代の藩主の内5人[3]が備後守であった））」と揶揄されたように財政難に喘いでいた。領地は延岡を中心とした県北一帯（ほとんどが山岳地）を主とするが、大分、宮崎市東部などに飛び地があって、領地の分散による非効率的[4,5,6]な統治を強いられていた。7万石は石高に併せたもので実高は二万石ほど少なかったらしい[2]。

そこで、内藤氏は殖産興業[5]に意を用い、経済学者佐藤信淵[7,8]（明和6年（1769）～嘉永3年（1850））を江戸より招き指導を受けると共に、寛政12年（1800）各種生業（菜種、楮（紙）、櫨（蝋）、麻苧、椎茸、茶等）の振興[4,5,9]を目的として一時的に植物方を置いたがその政策は成就することなく文化3年（1806年）には植物方も廃止された。しかし、内藤氏は約10年後、文政2年（1819年）産物官として功のあった赤坂四郎太夫[1,5,8,9]（安永7年（1778）～天保13年（1842））を抜擢して再び植物方を置き、彼をその奉行に任じた。また、天保7年には本草薬の取り扱いの場を薬店会所[4,5,8]として専売制とした。だがこの時も本格的な薬草栽培までには至らなかった。皮肉にも赤坂四郎太夫が死去する頃、再び薬草栽培の機運が徐々に高まり、本草学に通じた人物が藩内外に求められた。当時、世に得ていた名声と評価から、最新の知識を持った人物として、本庄村（現；宮崎県東諸県郡国富町）出身[10]の医師、本草学者である秋月橘門に白羽の矢が立てられた。

3．秋月橘門[10,11,12]

1）橘門の系譜

秋月橘門は明治以後の名前で、それまでの姓は水筑（みずき）、号を大可（たいか）（哥とも書く）と称した。橘門はその号である。よって水筑大可あるいは後述の之龍（これたつ）は良く使われる。日向・高鍋藩（2万7000石）秋月家の分家で文化6年（1809）生まれである。幼名は周一、字は伯起（はっき）、小相（こすけ）と称し、諱（いみな）（死後にいう生前の実名）は龍、または之龍という。本論文では最新の名として秋月橘門を主に用いることにする。

祖先は中国漢の高祖（劉邦）の末裔で姓は劉であった。この系譜は古代朝廷に帰化して蔵（くら）の管理者であったため劉から大蔵となった後、九州大宰府に下って分家、戦国時代に北部九州（筑前、筑後、豊前）を制した豪族（秋月、高橋、原田）として名をとどめる由緒ある家柄である[13]。

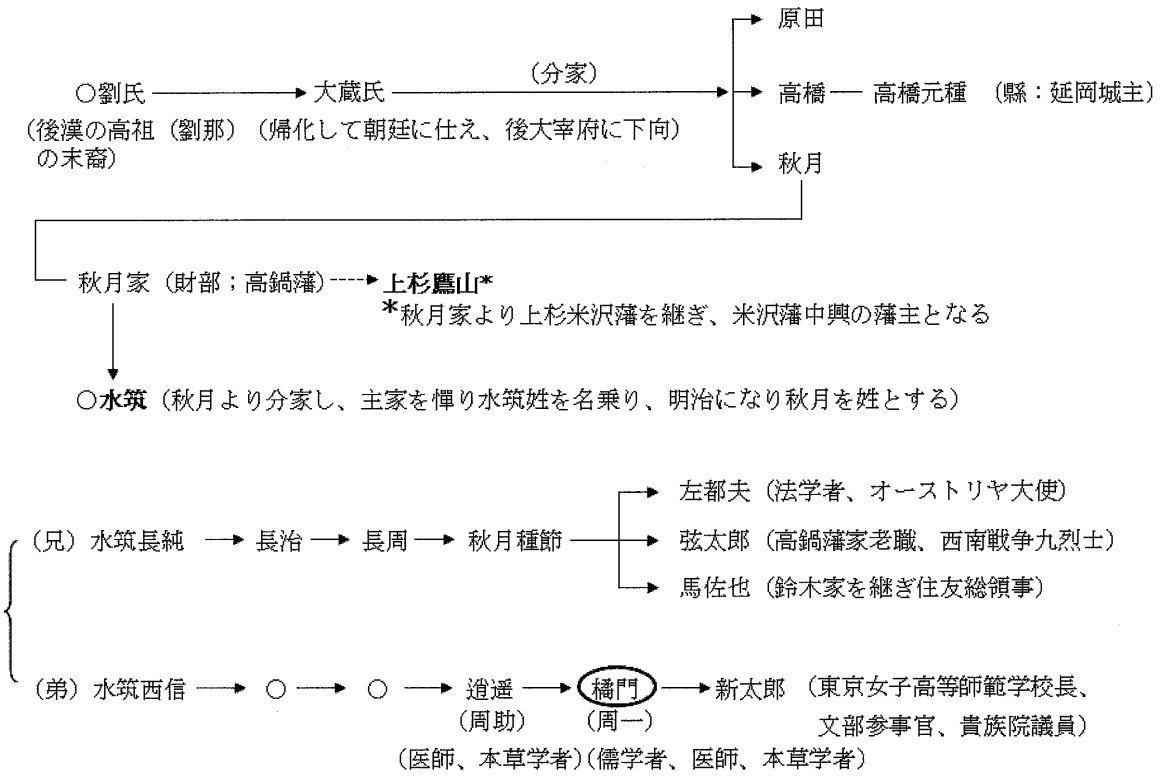
豊臣秀吉の九州征伐後に実の兄が秋月氏として財部（たからべ）（現在の高鍋）、弟が高橋氏として縣（現在の延岡、当時は延岡ではなく縣と称した。）に入封[2,4,5]した。後、秋月氏より、上杉家米沢藩中興の人、上杉鷹山公[5,14]（1751～1822　秋月種美の次男）を輩出したことはつとに有名である。

さて、秋月橘門の高祖父、西信はその兄、水筑長純と共に高鍋藩秋月公に仕えていたが一時讒言により国を追われた。しかし、やがて無罪が判明して兄は複職したが弟である西信はこれを潔しとせず野に下り諸県郡（もろかたぐん）本庄で生涯を終えている。この西信のひ孫、すなわち橘門の父、逍遙（通称；周助、字；善卿、号；西疇、安永7年（1778）～嘉永7年（1854））は医業に励み、延岡藩に仕えた事もあるとされるが家を興さんと子に厳しい教育をほどこした。（図－1）

2）橘門の略歴と人脈[11,12,15,21]

橘門は文政7年（1824）4月16歳の時、日田の広瀬淡窓[15]の咸宜園（かんぎえん）に入門[11,16,17]した。彼は優秀であったが学資、生活に窮していた。このことを日田の代官塩谷大四郎[5, 11, 15]は知り秘書役として召抱えようと師の淡窓に伝えさせたところ、「龍の学ぶ所以は豈に人の為に役するにあらんや、且つ代官何する者ぞ」（図－6の碑文にある）としてこの申し出を拒んだ。当時は若く、血気も盛んであったと察せられるが、彼は「生来、率直遠慮なく意見を述べる爽快な気質であり」、このような言葉を吐いたものと思われる。このようなことで、代官塩谷大四郎の怒りを買い、日田に居られなくなった橘門は一時、佐伯の同門下生、中嶋子玉[18]の家に身を寄せていたが、師、淡窓は塩谷代官とのかかわりが深く、代官の意を憚り自分の師家である筑前（福岡）の亀井塾（亀井昭陽[19]に身を引くようにと紹介した。

文化から文政にかけての各藩は、藩政の改革を進め、



図－1　秋月　橘門系譜[11,13]

長崎の異国船問題等から洋学や封建思想の教化も含めて文教政策[3,4]に力を入れた。中でも肥前島原藩は文政2年（1819）藩校（稽古館）の再建をはじめとして、領地の津々浦々に私塾を広め、下々にまでも寺子屋教育を浸透させた。広瀬淡窓と亀井昭陽の薦め[3]もあり橘門は天保元年（1830）島原に儒学の塾を開いた。しかし、彼は自分の理想とする儒学教育が望めなかったためか、塾への熱意は余り感じられず、代わって業として医の道に興味を持つこととなった。

彼は日田の咸宜園や筑前の亀井塾の塾生時代を含め、広瀬淡窓、亀井昭陽、帆足万里（筑豊の3儒学者[20]という）、備前（岡山）の難波抱節（立愿）[21]、師同士の交流、さらに、帆足万里の最高弟、賀来佐一郎（佐之；後述の賀来飛霞の兄）[3,20,22,23]等の塾生同士の交流は彼の後半生に人脈として大きな影響を与えたものと推察される。（表－1、図－2、図－3）

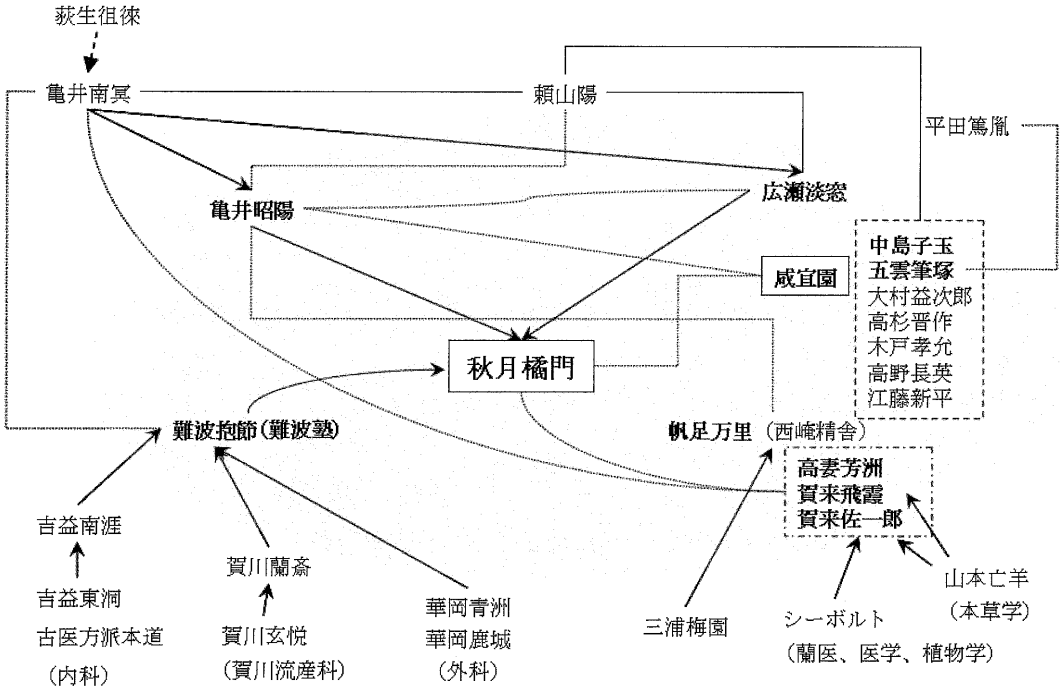
医業を志した彼は故郷の本庄で医師をしていた父、周助（逍遥）の下に島原より一時帰郷するなど、彼の生い立ちと生活の場を転々とする生き方に関しては謎が多い。

1835年、橘門は亀井昭陽の勧めもあったのか備前（岡山）の難波抱節（立愿）の思誠堂[21]に入塾して、内科（吉益東洞からの古医方派本道）、外科（華岡青洲、鹿城）、産科（賀川玄悦からの賀川流産科）等の最新の医学（当時としては漢蘭折衷の本草学）を習得した。その後、彼は塾時代の知人と旧交を温めながら江戸、京都、大阪で見聞を広め、高松、多度津（現在の香川県）経由で帰郷している[11]。

彼は故郷の本庄にて一時開業し、好評であったことから、ここに落ち着くかと見えたが彼の博学と卓見する政治力は彼をして延岡の地に行かせた。ここで初めて延岡の地と橘門の接点が生まれることになる。

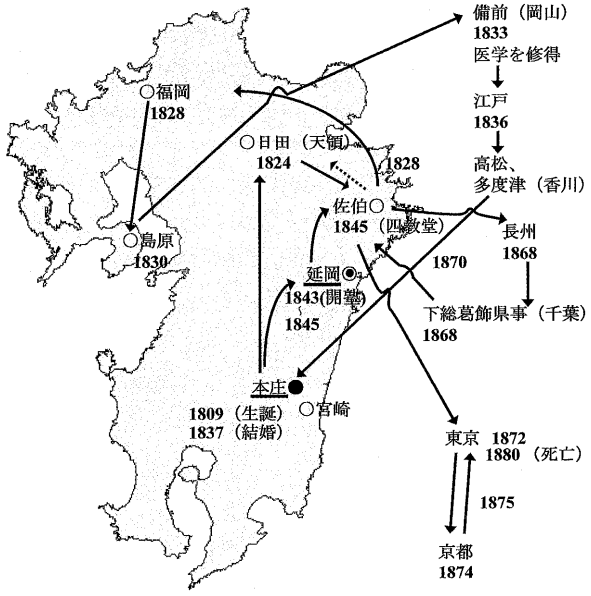
そこで上述したように藩内外の情報から延岡藩が求める最新の本草学、医学を修めた人物として浮かんだのが秋月橘門であった。当時、物産奨励の中心人物、前述の赤坂四郎太夫や藩筆頭侍医早川図書の声もあって、招請された。そして、延岡（内藤）藩より町医（図－4）として2人扶持を受けて城内にも出入りが許可（図－5）され、当時の植物方関係者や薬草栽培に興味を持つ家老達とも交流している様子[24]からも藩関係者の期待が伺える。また、その親交の深さは彼が延岡の地に来るのと相前後して死去した赤坂四郎太夫の墓碑文を彼が延岡を去っていたにもかかわらず佐伯藩から撰し[1]送ったという事実もある。

その後、家老上田但馬を中心とした関係者から延岡藩領内薬草採薬調査（実態調査）の気運が起こると、かね



図－2　秋月橘門を取り巻く人脈図

関係；師 ──→ 弟、交流 ┈┈ 枠内は交流
広瀬、亀井、難波、帆足はお互いに交流し、各塾生を派遣入塾させた



図－3　秋月橘門の九州および本州、四国における移動[11]

てから橘門が提案していた本草学者賀来飛霞の招請が家老上田但馬の内意としてあり、親友としての依頼を行った[24]（天保15年8月）。この賀来飛霞については後世、日本の本草学を大成させ、近代植物学の基礎を築いた人物と評価されている。橘門が知友（賀来佐一郎等）の中から賀来飛霞をこの実態調査に最適任者であるとして選んだのは、彼が写実に長け、当時、日本各地を踏査したという実績や、また天保12年（1841）、南九州の採薬遊歴中、わざわざ橘門の自宅に立ち寄り[24]、しばらく滞在するなど橘門と肝胆相照らす仲であったからとも考えられる。この賀来飛霞についてはいずれ報告の予定である。

しかし、不思議なことに彼はこの薬草栽培の目的を途中で投げ出している。すなわち、彼の人生はこの時点から大転換を起こす。咸宜園同門、中島子玉、高妻芳洲[18,27]（士直）のいた佐伯藩に移ることになったのである。

何故、この時、彼は延岡より遠く離れていない佐伯の地に移ったかについては全く不明であるが、彼等からの強い要請に拠るものか、佐伯藩主毛利高泰公からの強い招聘に拠るものか、更に高妻芳洲からの教授推薦[18]もあってのことかはわからない。結果としてついに佐伯藩校四教堂教授となっている。やはり、彼は儒学の道に生きることをかねてからの志望としていたのだろうか。ただ延岡藩の薬草採薬調査については賀来飛霞を延岡に招く手筈を整え、後顧の憂いが無いとの確証を持ちながらも、また、いつでも助言が可能な佐伯という近隣の地に住む気安さもあり佐伯藩へ移って行ったと思われる。

以後、佐伯に移った彼は、佐伯市龍鼎山養賢禅寺の境内に建てられた橘門追慕[18,27,28]の「故葛飾懸知事秋月橘

右之者、昨夜六時過頃ゟ盆踊見ニ差遣候処、
板田橋下タニ而水あび候由之処如何仕候哉、
溺候様子ニ而声立候趣、近辺之者共聞付
船乗出引揚候処、暖りも御座候付、早速医師
水城大可并児玉東碩相頼、種々薬用
療治等為仕、尚又寺内之もの共介抱為仕候へ共
養生不相叶、今朝五時前相果申候、
全自身水溺候儀相違無御座、惣身無疵ニ而
聊以怪敷筋毛頭無御座候間、御検使
御見届之儀、御用捨被成下候様奉願候

図－4　町医としての活動[25]
（天保14年7月15日）

一　早川宗吉儀、御領本庄十日町医師水城
大哥、御領富高日知屋村医師黒木
半弥儀、宗吉方江医術為執行罷越
逗留罷在候処、宗吉儀
御城内掛合之病家有之候付、右両人儀
此表逗留中為代診
御城内出入　御免之儀、今日願之通被
御聞届候事

図－5　入城の許可[25]
（天保13年11月26日）

表－1　秋月　橋門　年表[12,24,26]

西暦年	年号	年齢	事柄	医療関係人物
1809	文化6年		初名；周一、諸県郡本庄村に誕生	
1824	文政7年4月2日	16	水筑周一、日田の広瀬淡窓に入門	シーボルト長崎郊外に鳴滝塾を開く
1828	文政11年11月22日	20	亀井都太郎（昭陽）方寄食	新訂和欄薬鏡（宇田川玄真訳・容庵校補）
			この頃青木周馬と称す	シーボルト帰国の際暴風に遭い禁制品持ち出しが発覚し出島に幽閉
1830	天保元年	22	島原に塾を開く	
1831	天保2年5月下旬	23	帰省	
1832	天保3年	24	島原で再び開塾	医原枢要（高野長英）刊行
1833	天保4年	25	帰省、備前難波塾にて医学を修む	植物啓原（宇田川容庵）できる 伊東玄朴、江戸下谷に私塾象先堂を開く ズーフの蘭和辞典ズーフハルマの翻訳できる
1836	天保7年	28	水筑大可と称す。江戸に遊ぶ、高松、多度津経由で帰郷	窮理通（帆足万里）できる
1837	天保8年	29	結婚	
1838	天保9年	30	本庄に在郷	緒方洪庵大阪に適塾を開く
1839	天保10年	31		蛮社の獄（渡辺崋山、高野長英）
1841	天保12年	33	長男新太郎誕生	天保の改革
1843	天保14年	35	延岡に塾を開く	
1844	天保15年8月	36	飛霞に延岡での採薬を依頼する	
1844	弘化元年	36		オランダ軍艦長崎に入港、国書をもたらす
1845	弘化2年2月12日	37	佐伯藩主毛利高泰（泰雲公）の招請により 延岡から佐伯に移る	
	弘化2年3月		延岡へ飛霞がくる　妻子を佐伯に、小相と改名	
	弘化2年7月8日		藩校四教堂教授となる	
1846	弘化3年2月25日	38	帰郷、両親、姉とも佐伯に引き取る	
1847	弘化4年5月28日	39	給人格	伊東玄朴の建言により鍋島閑叟西洋種痘法に必要な牛痘苗をオランダ人に注文
1849	嘉永2年	41		楢林宋建オランダ牛痘苗により種痘成功、鍋島閑叟藩内でオランダ法種痘実施、 牛痘小考（楢林宋建）、病学通論（緒方洪庵）できる
1853	嘉永6年6月2日	45	書物奉行を兼任	米ペリー浦賀に来航（6月）、露プチャーチン長崎来航（7月）
1854	安政元年7月18日	46	父（長治、通称周助、逍遥軒、西信と号す）没す	ペリーと日米和親条約（神奈川条約）調印
1855	安政2年	47	長男新太郎（15）咸宜園に入門	
1856	安政3年	48		広瀬淡窓没す（11月1日）　ハリス下田に来て玉泉寺に入る
1857	安政4年	49		オランダ軍医ポンペ・ファン・メーデルフォールド長崎海軍伝習所教官として 医学を伝授する 吉田松陰松下村塾を拡張し主催する
1858	安政5年	50		日英、日蘭、日仏条約調印 伊東玄朴ら江戸お玉ヶ池に種痘所（西洋医学所）を開設 福沢諭吉中津藩江戸屋敷で蘭学塾を開く 梅田雲浜ら投獄さる、僧月照入水没す
1859	安政6年8月2日	51	母（80）没す	橋本左内、頼三樹三郎、吉田松陰死刑
1860	万延元年	52		勝麟太郎ら咸臨丸で品川より出帆 桜田門外の変 長崎に洋式病院設立し松本良順病院長となる 種痘館を種痘所と改称し仙台藩医大槻俊斎頭取となる
1861	文久元年	53		種痘所を西洋医学所（後の東京大学医学部）と改称し洋方内・外科医学を 教授する 福沢諭吉、福地源一郎ら遣欧使節の随員として出発
1862	文久2年	54		和宮親子内親王降嫁 坂下門外の変 緒方洪庵西洋医学所頭取となる
1863	文久3年4月4日	55	佐伯藩主毛利公へ侍講	西洋医学所を医学所と改称 仏英米蘭と長州・薩英戦争
1864	元治元年	56	長男新太郎大阪へ遊学（2月16日～9月14日）	蛤御門の変、佐久間象山暗殺、平野國臣獄死 第一次長州征伐
1865	慶応元年	57		長崎大浦天主堂竣工 典薬寮に西洋医法と混用するを禁ずる
1866	慶応2年	58	長男新太郎中小姓本格	第二次長州征伐
1867	慶応3年	59		大政奉還
1868	明治元年	60	藩命により長州へ派遣（4月10日～25日）、 給人本格（5月1日）、弁事局出仕諸侯掛拝命（5月19日）、 下総葛飾県事（11月）	福沢諭吉学塾を慶応義塾と改称
1869	明治2年	61		海外修学を許可
1870	明治3年	62	下総葛飾県事を辞任、佐伯に帰藩（2月）	
1872	明治5年	64	長男新太郎に迎えられ上京	
1874	明治7年	66	京都に遊ぶ	
1875	明治8年	67	東京に帰る	
1877	明治10年	69	長男新太郎、西南の役征討軍本営付	西南戦争（2月15日～9月24日）
1880	明治13年4月26日	72	没す　長男新太郎、田原坂崇烈碑書く	

門先生追悼碑」（図－６）にあるように、藩侯に侍講するなど儒学者、教育者としての働きが延岡藩に居た時と同様に佐伯藩においても目覚しい。

やがて、彼はその交流人脈（図－２）や当時の世評からか、明治新政府になると地方の小藩の陪臣でありながら新政府に召し出だされた。彼は三河県知事に任じられながら赴任しないうちに鎮守府弁事、やがて葛飾（千葉）県知事になるなど統率力、政治力、慧眼力を発揮し、儒教に則り民力を涵養して治績を挙げている。一地方の儒学者がこのように時代の波に乗って活躍した経歴に筆者等は驚嘆を覚える。明治３年（1870）彼は職を辞した後、東京で悠々自適の生活を送っていたが、明治13年（1880）没している[11,18,27]。彼の延岡における居住はわずか２年余りであったが医学、本草学に詳しかったことから近くの佐伯に移った後もこの延岡の地に大きな影響を与えたと考え、ここに「秋月橘門は延岡（日向）における薬学発祥の第一人者」と挙げる所以である。

考察

１．延岡藩における橘門の功績

１）医師として

彼が習得した医業精神やその人生観について考察してみると広瀬淡窓、亀井昭陽の儒学から人の踏むべき道を身につけ、また、帆足万里と親交があって万里と同じ考え方[20-21]に立って儒学をベースに、医学を実証的（科学的）に見ようとする医学の師、難波抱節より実証的な漢蘭折衷の技術とその精神を学んでいる。彼の学んだ塾「思誠堂」は難波抱節の考え「儒医一道」に基づいて創られたもので、科学的な医術の習得と医師としての全人的な教育を目指したものであった。現在の「医は仁術」を心得とする、あるいは倫理観のある医療人といえるであろう。

また、難波抱節については「図－２」から見てもわかるように当時の医師、指導者として一流の人物であったといえる。ここでも彼は優れた師、知友にめぐり合っている。以上のことから彼は医師たる人格を練り、一流の漢蘭折衷の医学を習得し、それを延岡の地で実践した。

２）本草学者、漢方医学者、薬師（くすし）として

延岡藩は上述の事情から、薬草の特産化の話が進んできた時、単なる採薬や栽培では従来と変わらず余り成果を上げられないことから、本草学（薬草としての真贋を含め）に基づく方法が必要になったものと考えられる。その結果、求められた人材が秋月橘門であった。

図－６　故葛飾懸知事秋月橘門先生追悼碑（大分県佐伯市）

彼は最新の知識を習得して故郷（本庄）に帰り、父の後を継ぎ、医業をはじめていたが、延岡に呼ばれて、その性格から薬草の採薬、利用、栽培に関して本草学上の率直な言を述べたものと思われる。一方、彼は本来の本草学の純粋な専門性（本草学が薬草に関する学問から植物学へ時代と共に移行しつつあった）から、限界を感じていたかも知れない。しかし、彼は延岡の地に本草学に基づく考え方を教え、彼の限界を解決する道として、今までの人脈を活かしたと言うことがなによりもこの延岡において果たした役割であろう。その後、彼の招きにより賀来飛霞が弘化２年（1845）３月薬草採薬調査（実態調査）のために延岡の地に来て調査[24]が行われ、飛霞の兄、賀来佐一郎の延岡藩薬草栽培指導の話[22,23,29,30]へと繋がった。その結果、明治維新後、明治３年（1870）延岡では廃城に伴い城内を薬草園にする（不明）という話は良く伝えられている。（図－7）

まさに秋月橘門は延岡藩で試行錯誤していた薬草栽培に曙光を与えた人物として高い評価がなされるべきだと言える。

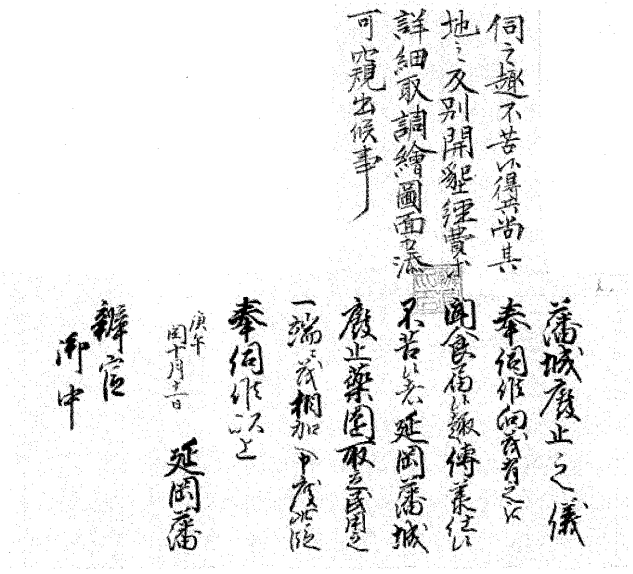
３）儒学者、教育者、政治家として

彼は、近隣の佐伯藩に移って、延岡で発揮した才能と異なり、佐伯の地に合うかたちで儒学者、教育者となり、時勢を得ては、前述したように明治維新後の政治行政官

として、三河県知事、鎮守府弁事、葛飾（千葉）県知事に起用されるなど、その功績から実直な政治家としての才能もあわせ持つ偉大な人物であったと言える。

4）橘門の人となり[11,27,31]

これに関して明治・大正時代に延岡光勝寺住職であった権藤正行氏の子供時代の話が残っている。橘門は正行氏の父の先生であり、秀でた人であった。秋月藩の出であったが藩主に遠慮して水筑姓を名乗っていた。また父は「橘門先生のような学者を延岡に留め置けなかったのは残念であった」といっていたという。三町消防（不明）の龍吐水の文字を書かれたのが橘門で、現在それがどこに残っているかということは不明のままである。延岡の文化は決して低いものではないとしきりに言っていたという。また橘門は人となりが方正で心清く私欲が無く後ろ暗いところが全く無かった。晩期の知事在職中は俸給の殆どを貧しい人に与えていたため役を退いた時は無一文であったという。また家庭にあっては孝心強く子女に優しく、平和で穏やかな生活を楽しんでいた。彼は漢文に優れ遺著も多い[10,18]。



伺之趣不苦候得共、尚其
地之反別、開墾経費等
詳細取調、絵図面相添
可窺出候事

藩城廃止之儀、
奉伺候向茂有之被
聞食届候伝承仕候、
不苦候者延岡藩城
廃止、薬園取立民用之
一端二茂相加へ申度、此段
奉伺候、以上
庚午閏十月十一日　延岡藩
弁官御中

図－7　廃城の跡を薬草園にという古文書[25]

ま と め

著者等は本学の立地した延岡市北西部（吉野町周辺部）がかつて延岡（内藤）藩の薬草栽培地であったのではないか、とも考えている。この根拠は現在も「センブリ」「ゲンノショウコ」「ウコン」「タラノキ」などが多く自生し、古老の話から、賀来飛霞の記録にあると思われる家の井戸や周辺の祠跡があったと考えられるからである[24,32]。

延岡は言うまでもなく、日照時間[33,34]（日数）が長く（日本一）、年間平均気温16.1℃、冬期は温暖かつ雪も降らない土地柄、したがって薬草栽培には好適の立地条件を備えている。秋月橘門が延岡の地に滞在したのは2年余りであったがその残した功績、貢献は大きいと言わねばならない。今後もなお、彼の遺業が延岡を中心にまだまだ残っていると考えられる。

謝辞

本論文を作成するにあたり、延岡市教育委員会文化課、内藤記念館学芸員　増田豪氏、並びに佐伯市文化財保護委員　山本保氏にご協力をいただいたことを記し、深く感謝申し上げます。

参考文献

1　松田仙峡：延岡先賢伝．藤屋印刷，宮崎；1956.
2　延岡市教育委員会文化課：築城400年記念『甦る延岡城．延岡市教育委員会文化課，宮崎；2003. pp.10.
3　桑波田興（長崎県史編纂委員会編）：長崎県史藩政編（島原藩）．吉川弘文館，東京；1973. pp.359－383.

4　木村礎：藩史大辞典　第７巻九州編．雄山閣出版，東京；1988．pp.213－505.
5　宮崎県（宮崎県史史料編）：近世２ pp.13－27，近世３ pp.1－41, pp.21, pp.644－649，近世４ pp.153－154, pp.166, 近世６ pp.17－43, pp.431，（株）ぎょうせい，東京；1995.
6　木村礎校訂：旧高旧領取調帳　九州編．近藤出版，東京；1979.
7　下中　弘：日本人名大事典第三巻．平凡社，東京；1990．pp.146.
8　延岡郷土年代表編集委員会：延岡郷土史年表．延岡史談会・延岡市文化連盟，宮崎；1998．pp.56－95.
9　宮崎県：赤坂四郎大夫の植栽事業：宮崎縣嘉績誌．宮崎県，宮崎；1915．pp.216－217.
10　坂本貞義：国富町郷土史．国富町，宮崎；1977.
11　秋月橘門：昭和55年度宮崎県地方史研究紀要．第７輯．宮崎県立図書館，宮崎；1981．pp.109－111.
12　宮崎県立本庄高等学校郷土部：筆塚．国富町，宮崎；1969.
13　吉永正春：九州戦国史．（有）葦書房，福岡；1981．pp.134－142.
14　安田尚義：上杉鷹山．日向文庫刊行会，宮崎；1952.
15　深町浩一郎：西日本人物誌（15）広瀬淡窓．西日本新聞社，福岡；2002.
16　中野範：咸宜園出身八百名略伝集.廣瀬先賢顕彰会，廣瀬宗家，大分；1974.
17　中野範：咸宜園出身二百名略伝集.廣瀬先賢顕彰会，廣瀬宗家，大分；1975.
18　佐伯市史編纂委員会：佐伯市史．佐伯市，大分；1974．pp.228－790.
19　荒木見悟：叢書日本の思想家　亀井南冥・亀井昭陽．明徳出版，東京；1988.
20　帆足図南次：人物叢書134巻　帆足万里．吉川弘文館，東京；1966.
21　中山沃：備前の名医　難波抱節．山陽新聞社，岡山；2000.
22　入江潛（長崎史談会編）：隠れた洋学者賀来佐一郎佐之事蹟考（その一）：長崎談叢38．藤木博英社，長崎；1958．pp.20－35.
23　入江潛（長崎史談会編）：隠れた洋学者賀来佐一郎佐之事蹟考（その二）：長崎談叢39．藤木博英社，長崎；1959．pp.12－29.
24　澤武人，賀来飛霞（滝一郎解説）：みやざき21世紀文庫　高千穂採薬記．鉱脈社，宮崎；1997.
25　『内藤家文書』万覚書．第１部６－169，６－170（天保13年11月26日）．『内藤家文書』第２部10－162（天保14年７月15日）．明治大学所蔵.
26　日本歴史大辞典編集委員会：日本史年表　第４版．河出書房新社，東京；1997.
27　山本　保：「佐伯人物伝“歴史散歩”第９回　秋月橘門」：市報さいき．佐伯市，大分；1997．pp.20.
28　益田学：郷土佐伯の碑文．弥生町歴史と文化を語る会，1980．pp.1－7，pp.17－23.
29　日野巌：延岡藩の薬園と採薬（一）：「本草」16．1933．pp.17-24
30　日野巌：延岡藩の薬園と採薬（二）：「本草」17．1933．pp.49-58
31　延岡市立図書館長木谷俊二：郷土の話「権藤正行先生を囲んで話を聴く」：延岡草分け物語（昭和27年３月23日）．延岡市立図書館，宮崎；1978．pp.24－25.
32　日本植物の祖　賀来飛霞－県北での足跡たどる－．夕刊デイリー2003年（平成15年）１月１日．夕刊デイリー新聞社，宮崎（延岡）；2003.
33　延岡史編纂室：延岡市史（市制70周年記念10年史）．延岡市，宮崎；2003.
34　宮崎県大百科辞典．宮崎日日新聞社，宮崎；1983．pp.685.